



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究：中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として
Author(s)	王, 金偉
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 87-96
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61188
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_09oh.pdf



自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究 中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として

王 金偉

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

国際広報メディア・観光学院の観光創造専攻博士課程に在籍しております王金偉と申します。本日は「自然災害地における『負の遺産』の観光マネジメントに関する研究」と題して、中国四川省の「北川地震遺跡区」を事例に、「負の遺産」をめぐる社会構築の過程について発表させていただきます。

最初に、関連用語をご説明します。「負の遺産」とは社会や人類の発展を妨げるか、あるいは不幸をもたらすような事件や出来事の結果として残された「モノ（有形物）」や「コト（無形物）」です。「負の遺産」はその成因により、広島の「原爆ドーム」や「アウシュヴィッツ強制収容所」などのような戦争や虐殺行為などの結果として残された象徴的な遺産と、「ポンペイ遺跡」や阪神・淡路大震災の震災遺構（淡路島の「野島断層」など）のような自然災害に起因するものに区分できます。

次に、「負の遺産観光」とダーク・ツーリズムの関係性についてお話しします。近年、「負の遺産」は観光資源としても注目され、数多くの観光客を集めています。このような観光活動はダーク・ツーリズム（dark tourism）と呼ばれ、その用語は Lennon と Foley によって初めて使用され、彼らは、災害、戦争、死亡、虐殺、暗殺などの悲劇的な出来事にかかわる場所を観光することであると定義しています（Lennon and Foley 2000）。同じく、Tarlow もダーク・ツーリズムは「悲しいことが起こった場所、またそれが人々の生活に影響を与えている場所を見学すること」であると述べています（Tarlow 2005: 48）。彼らの定義によれば、災害、死亡、戦争、悲しみなどと関係する場所を観光することがダーク・ツーリズムとされていますが、観光客が哀悼や慰霊の意を抱いているかどうかは問題とされていません。

しかし私は、主体としての観光客には哀悼や慰霊などの感情があり、主体と客体（ダーク・ツーリズムの対象）の相互関係に着目することがより重要だと考えています。この点について、Slayton はダーク・ツーリズムとは観光客が被災地を巡り、悲劇を体感する過程であると述べています（Slayton 2006）。これは観光客の立場からダーク・ツーリズムを理解する視座であり、ダーク・ツーリズムの本質を反映したものであると考えます。

この二つの観点を参照しつつ、実際に展開している事例を考察すると、それらは広義のダーク・ツーリズムと狭義のダーク・ツーリズムに大別することができます。広義の場合は、災害、戦争などのネガティブな事象の客体を単に見学する観光活動を指し、狭義の場合は、哀悼、悲痛などマイナスの気持ちを動機として、ネガティブな事象の所在地へ観光することを指します。つまり、「ただ珍しいものが見たいという興味本位で見に行く形

態」と「意味を理解し自己の感情を動機として訪れる形態」の違いであり、当然、広義のものはその両方を含んでいます。

現在、ダーク・ツーリズムという言葉は学術研究に広く用いられていますが、ネガティブで暗いイメージが付きまとうため、実際の観光産業には馴染みづらいと言われています。また、大森は東日本大震災の被災地（石巻市）を事例とした研究の中で、ダーク・ツーリズムという言葉は「用語のネガティブなイメージ」や「受け入れる地域住民の反感」など 6 つの点で妥当性を欠くとして、被災後の復旧、復興の過程に対応した「復興ツーリズム」、あるいは地元住民や来訪者の心理的側面などに着目した「祈る旅」を新たな用語として提案しています（大森 2012）。大森が提起しているダーク・ツーリズムという表現の非妥当性については、私も十分に理解するものの、「復興ツーリズム」または「祈る旅」という用語は使用が時期（復興期）や来訪目的（追悼や祈念）によって限定されてしまうところに検討の余地を残していると言えます。例えば Yuill が、人々が「負の遺産地」を来訪する動機はさまざまであり、追悼や祈念のほかに、教育（防災教育、歴史・文化教育など）、懐古心、窺視心（ヴォイヤリズム：voyeurism）、他人の不幸を喜ぶ心理（シャーデンフロイデ：schadenfreude）なども含まれると指摘している点を踏まえると（Yuill 2003）、「復興ツーリズム」と「祈る旅」という表現から連想される、支援、追悼、同情などのポジティブな印象が、記憶として残すべき被害を被った空間、被災者、犠牲者、悲しみ、苦痛などの肝心なネガティブな意味を覆い隠してしまい、「負の遺産」が備えるべき教育上や歴史上の価値が失われる恐れがあるといえます。

このダーク・ツーリズムという表現に対し、前述したように、「負の遺産」という用語は学術研究のみならず、新聞や日常生活にもすでに多用されていることから、一定程度の社会的な認知を得ているといえるでしょう。

以上の議論を踏まえ、本研究においては「負の遺産」を観光対象としてめぐる旅を意味する一般的な用語として「負の遺産観光」を用います。「負の遺産観光」に含まれる「遺産」、「遺産観光」（ヘリテージ・ツーリズム）などのキーワードが地域振興や歴史教育、文化資源の保護など、ポジティブなイメージを連想させることから、「負の遺産観光」という表現は「ダーク・ツーリズム」と比して、地元住民や来訪者の心理的な抵抗感や反感が少ないものと考えられます。また、「負の遺産観光」における「負の遺産」という言葉は、将来に同じ過ちを二度と繰り返さないための戒めや、災害への備え（防災・減災）という意味において、「災害にまつわる過去のモノやコトを保存し後世に継承し伝えるべき」とする重要なメッセージを含んでいるところは、特に私が強調したい点です。なお、この用法の意図するところは、学術研究でのダーク・ツーリズムの使用を否定することにあるのではなく、また復旧・復興に相応しい「復興ツーリズム」あるいは「祈る旅」という用語も否定するものではないことをあらかじめお断りしておきます。

近年、多くの自然災害被災地では、「負の遺産」を観光資源化することに注目が集まり、その対象となる遺産の保存活動や観光開発が展開されています。また、先行研究によ

れば、「負の遺産観光」には地元住民、観光客、開発業者など多様なステークホルダーが関与しています。彼らの意向や感情に配慮しつつ、科学的な根拠に基づくマネジメントや組織づくりが行われなければ、「負の遺産」の保存はおろか、その活用にも支障をきたす可能性が生じると言われています。そのため、私は先日提出した博士論文において、ステークホルダーの視点から、「負の遺産」を保護し、その観光をマネジメントすることが必要であるという立場を取りました。そこで、「負の遺産」と「負の遺産観光」の基礎理論や学問体系を整理したうえで、中国北川羌族自治県の「北川地震遺跡区」を事例に取り上げ、地域社会を主体としてみた「負の遺産」と「負の遺産観光」のマネジメントの実態を詳しく検証するとともに、その成果と課題を抽出し、「負の遺産」をめぐる持続可能な観光開発のあり方とその条件を明らかにすることを目的としました。繰り返しとなりますが、本日はその中でも特に「負の遺産」の社会構築の過程に焦点を当てて、その成果を発表したいと思います。

現在、「負の遺産」は歴史上、学術上の価値を有する貴重な資産と認識されています。一方、現実における「負の遺産」の保存と活用は多くの問題を抱えています。特に、災害が収束した被災地における「負の遺産」の保存と活用は、識者や国民の議論を巻き起こし、これらに対する反対が表明されることもあります。これらの議論は被災地の復興と災害跡の保存や活用の進展を監視する重要な役割を有しています。にもかかわらず、大部分の反対者は地元住民ではなく、外部者としての識者とネットシチズン（インターネット利用者）であり、災害跡の保存や活用について、被災地の状況をよくわからないまま、自分の価値観に基づいて評価しています。それは地元の状況や住民のニーズに応じた評価ではないため、災害跡の保存や活用の妨げになり、またなにより、地元住民の感情を傷つけ、住民の日常生活にマイナスの影響を与える恐れがあります。したがって、「負の遺産」の保存・活用をめぐる議論をする際には、新聞やインターネットにみられる識者やネットシチズンの意見だけでなく、地元住民、「負の遺産」を実際に訪れた観光客、当該地の地方政府や観光企業のスタッフなど、被災地と直接的に関係している者の言説を踏まえる必要があります。

そこで今回の発表では、「北川地震遺跡区」における観光客、地元住民、地方政府や観光企業のスタッフなどの声をもとに、震災遺構や遺物等の「負の遺産」化とその保存・活用がいかになされたのか、その過程を社会構築主義の理論を援用して明らかにしようと試みました。具体的には、「負の遺産」は誰を主体としてどのように構築されるのか、またどのような過程を経て構築されるのか、さらに構築された「負の遺産」はどのように社会に広がっていくのか、これらについて分析していきます。

「社会構築主義」の起源となった著作の一つは、Berger と Luckmann による『現実の社会的構成』（The Social Construction of Reality）であり、そこでは現実社会的に構成されたものであるということが主張されています。すなわち、社会における「現実の社会現象や、社会に存在する事実や実態、意味は全て人の感情や意識の中で作り上げられる

もの」とされています（熊谷 2011: 310）。社会構築主義は、主に以下のような立場をとります。現実には、受動的な認識あるいは静観することで構築されるのではなく、認識や発見を通して能動的に言語や意識で創造される、すなわち再生産あるいは再構築されるものとして現実を捉えます（Berger & Luckmann 1966）。また、山形によれば、現実には個人が周囲の他者や社会と関わり合うことで自分の意識や感情の中で構築されるものであり、「他者との関係という社会性が強調されている」ものといえます（山形 2012: 209-212）。さらに葉は、そのような現実の構築は、個人が身を置く社会環境の影響を受け、社会・文化や制度、経済状況などにも制約されていると指摘しています（葉 2003）。この考えに従えば、同じ対象に関することであっても、その社会環境の違いによって、各人が構築する現実とは異なることになります。

そこで本研究では、どのような主体がその構築にいかなる関わりを持つか、特にその関与の様態に着目し、「観光地としての地域社会にかかわるステークホルダーの有する意識の全体像と全てのモノやコト、つまり一つの社会としての観光地は、社会構築主義の観点から、主に地元住民、観光客、行政、観光企業など四つの主体による相互作用によって構築されていく」との仮説を提示しました。

上述の四つの主体による社会構築は、本研究が事例とする「負の遺産地」という観光地においても同様の主体である考えられます。ただし、今回の研究対象地域については、「観光地の社会構築」を「負の遺産の社会構築」と言い換えることができるでしょう。なぜなら、観光地としての「北川地震遺跡区」は、地域社会の全体を空間的かつ社会的に包含し、地元住民の生活の場であるとともに、それ自身が「負の遺産」であるからです。次に、「研究対象地域と研究方法」について説明します。本研究の研究対象地域は中国の北川県における「北川地震遺跡区」です。2008年5月12日、四川大震災が発生し地域に甚大な被害をもたらしました。スライドの写真で被災地の様子をご覧いただいています。現在でも、ご覧のように多くの遺構や遺物が残されています。

これらの遺構や遺物などを保護するために、地方政府は多くの方策を取りましたが、その一つとして「北川地震遺跡区」という保護区を定めています。この保護区の中の資産は、「老泉城地震遺跡」と呼ばれる震災時の県庁所在地の町全域の廃墟、「5・12 汶川特大地震記念館」（以下、5・12 地震記念館という）、唐家山堰止湖です。現在、世界で規模が最も大きく、保存状態も完全な自然災害跡の一つです。四川大震災の直後、多くのボランティアが救援、支援のために当地を訪れましたが、以来「北川地震遺跡区」は次第に中国の有名な観光地となり、毎年多くの観光客が復興祈念や追悼などのために当地を訪れるようになりました。

ここで、研究方法をご説明します。主な手法は文献調査とフィールドワークです。スライドの表に示しているとおり、現地でのインタビュー調査は合計 55 人を対象とし、内訳は、地元住民 18 人、観光客 20 人、スタッフ 17 人です。

では、調査の結果をいくつかの項目に分けてお話しします。まず、震災のことを伝える解説の内容についてです。スライドでお示ししている解説文Ⅰ～Ⅳは地震の状況や「負の遺産」を知らせる標示です。「受難」，「死者への冥福」，「倫理」，「共産党への感謝」，「愛国主義教育」などに関連する解説文が書かれている看板などが、路傍の至るところでみられることが確認できます。

解説文Ⅰ：スローガン

共産党の恩に感じ、国民の人情に感謝し、新たな北川を再建する。愛を心に刻み、震災跡を保護し、犠牲になった同胞を弔う。

解説文Ⅱ：スローガン

土一掴み、浄土一方、天国一つ

（筆者注：「犠牲者に一握りの土を捧げ、冥福を祈る」という意味）

解説文Ⅲ：「北川老泉城地震遺跡簡介（老泉城地震遺跡紹介文）」（表示板）の一部
老泉城地震遺跡は、震災の爪痕の姿をそのまま保存したものとして、今に至る世界一の災害遺跡である。…ここは全国愛国主義教育基地であり、全国紅色観光地でもある。また偉大な震災救援精神を広めるものであり、愛国主義教育を行う場である。さらに、羌族の文化を継承し、地震の知識を普及する重要な舞台である。

解説文Ⅳ：「向罹難同胞“献愛心，捐墓地”活動倡議書（犠牲になった同胞を悼むための祈念墓苑に対する不動産の無償譲渡の呼び掛け）」（看板）の一部
老泉城地震遺跡をよく守り、震災跡の保護と記念館の建設を全力で支持し、震災跡の静寂と厳粛を維持する。…犠牲者に安息を与え、生者に永遠の安心を実感させる。これは、犠牲者に対する最もよい追悼と尊厳の態度であり、（共産）党と国家の多大な配慮に恩を感じ、社会に恩を返し、思いやりを表現するべく「愛心北川」をつくりだすものである。

これらによって、「負の遺産」としての震災跡には、地質遺産の意味の他に、精神的かつ倫理的要素も与えられていることがわかります。このような被災地で最初に生まれた隠喩は、人々の中で「負の遺産」に対する観念が築き上げられる過程で、決定的な役割を果たします。「負の遺産」は徐々に精神的・倫理的側面が強調され、愛国主義思想に特化した形で再構築されます。四川大震災は人口密度の高い地域で発生し、人々に甚大な損害を与えたことや、政府や軍隊や共産党員などが復興活動に参加したことなどから、もともとは地質現象であった地震の結果としての「負の遺産」が、「精神遺産」，「倫理遺産」，「愛国主義遺産」という側面ももつようになりました。したがって、「負の遺産」の保護

は「倫理を守る」、「死者への尊敬」、「愛国主義を発揚する」ことに繋がっていききました。

続いて、第一の主体である地元住民のインタビュー内容を分析した結果、彼らの言説には「地震直後および復興に関する経験を主題とする話」と「『負の遺産』の保存・活用（観光資源化）に関する話」が必ず含まれていることがわかりました。

地震直後および復興時の経験について

私たちは地震の 2 ヶ月後、浙江省から北川県に帰りました。老泉城の人たちはもう全部、他所に移動していました。…私の兄が亡くなって、とても悲しく思います。（C-12、男性、中年、農民）

たくさんの人がなくなり、たくさんの建物が崩れ、私の住む家もなくなりましたが、仕方ありません。…私は震災後、何度も老泉城に行って、引越しを手伝いました。そこでは、地震で死んだ人が多いのですが、動物が死んだのと同じような感覚でした。被災地を救援する時、亡くなった人がとても多すぎて、床に並んで、立っているところさえありませんでした。もう少し怖くありませんでした。（C-01、男性、中年、経営者・農民）

（低い声で）夫が地震で私と息子を残して、亡くなりました。夫は病院の改修工事で働いていて、震災に遇いました。私は探しに行きましたが、ショベル一本ではとても無理でした。お医者さんなども建物の下に閉じ込められてしまいました。その時は非常に悲しい思いをして、そのせいで、病気になり、入院して何ヶ月も治療しました。（C-08、女性、中年、農民）

「負の遺産」の保存・活用について

震災跡は、地震の後 2008 年から、そのまま整備・保護されました。その後震災跡には警察も配備され、管理されています。…（筆者の地元住民への質問：観光客は震災跡を見て、どのように感じていますか）。悲しいでしょうね、涙をいっぱい浮かべています。…学校跡や政府跡などでガイドの説明を聞いて、大変、惨めな気持ちになるでしょうね。（C-02）

今、「負の遺産」の保護と観光としての整備ができました。観光客が多いです。老泉城地震遺跡の与える印象のほうが悲しいものですが、地震記念館のほうはそんなに悲しくありません。地震記念館は去年（2011 年）にできました。その中に古いものが保存されて、押し潰された車などが保存されています。…観光客が行けば、震災で亡くなった人が多いことが実感できます。（C-12）

北川県に観光に来る人はとても多いのですが、多くの人が泣き出します。特に、万人坑（筆者注：老泉城地震遺跡における身元不明者墓地）で泣き出す人は少なくありません。（C-08）

この点について詳しくご説明します。地元住民の経験談や震災への思いを尋ねると、最初はすべての話が地元住民の悲しみや苦痛などに還元されていきます。こうした記憶が震災跡に投影され、廃墟や遺物をみると、不安や悲しみの記憶が蘇ります。「負の遺産」の震災跡は地元住民にとって、震災経験の記憶と同じように感じ取られます。

ただし、「地震直後および復興に関する経験を主題とする話」と「『負の遺産』の保存・活用（観光資源化）に関する話」という上記の二つの話題を比較すると、地元住民の悲しみや苦痛などの表現に微妙な変化がみられます。前者では、地元住民は主に地震や復興の実感を述べていますが、後者では、「他者」（観光客など）の悲しみなどについて述べています。地元住民は、観光客の震災跡に対する悲しみの反応によって、自分の心の痛みを再確認させられ、地元住民自身が「負の遺産」から受け取ったネガティブな感情をさらに強めます。また、時間が経過する中で、地元住民が他地域からの来訪者、地方政府などと接触した結果、「負の遺産」に対して悲しさの他に、新たな意味が形成されています。まず、多くの地元住民は、「負の遺産」について、これらの悲しい記憶を忘れないように、子孫に語り継がなければならないと考えるようになります。また、地元住民、特に親族が亡くなった人にとっては、これらの「負の遺産」は特別な追悼の対象でもあります。

ここで、第二の主体である観光客の側に目を向けてみます。観光客が北川県に来る前に得た「負の遺産」に対する認識は、主としてテレビや新聞、インターネットなどからの情報によって形成されていました。現場に行ったことがないため、「負の遺産」に対する認識は自分自身のそれまでの経験や推定のほかは、メディアに頼るしかなかったと言えます。しかし、中国のメディアが流す情報は、主に地震の損害状況や援助内容など客観的な情報に留まります。ある観光客は、「私は新聞やテレビの報道をみたのですが、それでも大変悲しい思いをしました」と話してくれました。これらの来訪以前にみたメディアから伝わった悲しさは、無意識のうちに観光客の心の中に入り、「負の遺産」に対する認識の始点となります。しかし、「負の遺産」を実際に訪れた観光客は、現場での体験から「負の遺産」に対する認識を大きく変化させ、多くの観光客は地震の悲しみと怖さをより深いところで認識します。また、「負の遺産」は犠牲者を追悼するものでもあります。さらに、「負の遺産」は人と地震の関係に対する認識を揺さぶります。例えば、ある観光客は、「人間は自然に対して小さなもので、自然の力に対して、人々は無力です」と語りました。一方で、観光客を啓発し、人生観や価値観に変化を生じさせる場合もあります。

以上の分析からわかるように、観光客は「負の遺産地」での体験を通して、その認識を変化させます。現場を体験した観光客の心の中には、はそのあまりに悲惨な印象から、苦難へのより強い共感や追悼の念が生まれます。このように「負の遺産」は、訪れる者の価値観や人生観に大きな変化をもたらすものであり、「負の遺産観光」は人々に人間と自然との関係を改めて考え直させる機会を提供するものであるということを指摘できます。

次に、第三、四の主体である地方政府や観光企業の分析に入ります。両者を一緒に分析する理由は、観光企業は主に地方政府によって設立されたものだからです。実は他の観光地については、この事例に当てはまらないこともあるのですが、この北川県の事例では両者は非常に密接な関係にあります。地方政府と観光企業のスタッフ個人は、実務者であるとともに、地方政府や観光企業と地元住民や観光客とを結ぶ架け橋でもあります。その彼らの「負の遺産」に対する態度や姿勢は、自分自身の認識を持ち続けながらも、地方政府や観光企業、地元住民、観光客それぞれからの影響を受けています。スタッフは四川大震災を経験した地元住民とそれ以外の者へと大別されますが、インタビュー分析を通して、地震の経験者ではないスタッフでさえも、「負の遺産」に対する認識は地元住民や観光客と合致しているところがあり、「負の遺産」を地震の恐怖や悲劇の象徴として、保存すべきだと思っていることも明らかになりました。

一方で、一部のスタッフは、観光客と被災者と頻繁な接触により、地震の悲しみや被災者への追悼の感情が緩和されたとも話しています。また、スタッフは地方政府や観光企業の実務者として、彼らの所属する機関の意図や方針の影響を受けていることがわかりました。現在、地方政府と観光企業のパンフレットや看板などに見られる解説では、科学的意義と愛国主義教育的意義が論じられています。そのため、スタッフは「負の遺産」には子孫に対する防災教育や愛国主義教育の意義があると考えています。さらに、スタッフの労働環境は「負の遺産」にまつわるものであるため、彼らはよく仕事の中の楽しさや嫌悪などの感情を「負の遺産」に投影することがあります。例えば、ある従業員は、理由もなく観光客から罵られたという不快な体験から、「負の遺産」にあまりよい印象を持っていないと言います。

最後に、議論のまとめに移ります。まず、「負の遺産観光」は主に地元住民、観光客、地方政府および観光企業など四つの主体による相互作用によって構築され、悲しみ、記憶、追悼、防災教育や愛国主義教育などの精神的かつ倫理的な意味づけがなされています。また、各ステークホルダーが「負の遺産」を構築するのは、彼らの意識の変化、あるいは意識の調整のプロセスにおいてです。例えば、地元住民の「負の遺産」に対する考え方は、震災直後および復興時には、悲しみや苦痛などであったものから、「負の遺産」の保存・活用時には、震災を記念したり、追悼したりする気持ちに変化しています。また、観光客は、来訪前に同情感を持っていますが、旅行後には、自分自身の人生観や価値観を見つめ直す存在ともなるように、彼らの意識が変化していくがわかりました。さらに、「負の遺産」への直接的な認識の内容、例えば、悲惨な経験や記憶などが「負の遺産」にかかわる諸活動にも隠喩されていました。被災者にとっては、「負の遺産」の保護は犠牲者の追悼となるだけでなく、追悼行事を通して防災や後世への教訓として活用しようとする動機を醸成していることも確認できました。

以上で発表を終わります、ありがとうございました。

※ 本稿は、日本観光研究学会機関誌の『観光研究』25号2巻に掲載された、「中国の観光地における負の遺産の社会構築に関する研究—四川省北川チャン（羌）族自治县を事例として—」を加筆修正したものである。なお、ダーク・ツーリズムの用語の定義等の記述では、同じく『観光研究』27号1巻（近刊）に掲載予定の、「中国の自然災害地における負の遺産解説に対する観光客の意識と評価—四川省北川震災跡区を事例として—」の一部を加筆修正して用いている。

文 献

Berger, P. L., & Luckmann, T.

1966 The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge, New York: Doubleday.

熊谷忠和

2011 「社会構築主義における理論的潮流の再整理の試み」『川崎医療福祉学会誌』20(2): 309-318。

Lennon, J. J., & Foley, M.

1999 Interpretation of the unimaginable: the US Holocaust Memorial Museum, Washington, DC, and “dark tourism”. Journal of Travel Research 38(1): 46-50.

2000 Dark tourism: the attraction of death and disaster, London: Continuum.

大森信治郎

2012 「『復興ツーリズム』或は『祈る旅』の提言—『ダーク・ツーリズム』という語の使用の妥当性をめぐって」『観光研究』24(1): 28-31。

Slayton, S. L.

2006 Ground Zero-Tragedy, Terror and Grief Tourism. (Internet, 12th August 2014, <http://www.grief-tourism.com/ground-zero-tragedy-terror-and-grief-tourism>). Tarlow, P. E.

2005 Dark tourism: The appealing ‘dark side’ of tourism and more. In M. Novelli. (ed.) Niche Tourism: Contemporary Issues, Trends, and Cases, pp. 47-58. Oxford: Butterworth-Heinemann.

山形直史

2012 「科学哲学：観光研究における思考基盤」『第27回観光研究学会全国学術論文集』209-212。

葉浩生

2003 「第二次認知革命与社会建構論的產生」『心理科学進展』11(1): 101-107. (中国語)

Yuill, S. M.

2004 Dark Tourism: Understanding Visitor Motivation at Sites of Death and Disaster. Master's Thesis. Texas: Texas A&M University.